

平成27年度学校評価実施報告書

次のとおり学校評価を実施しましたので報告します。

学校目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価	学校評価
	具体的な手立て	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		
1 「自立と社会参加」に向け、小学部から高等部を通じた系統性・発展性のある教育課程の内容構成に基づく授業の改善	<p>(1)小学部・中学部・高等部の年齢や発達段階に応じた指導の連続性の確立を図る教育課程の充実を進める。</p> <p>(2)教科会等を活用し、実践報告に加え、授業を見合う等の機会を設定し、学部・学年間の指導の連続性を意識する。</p> <p>(3)清掃技能検定等に計画的に参加し、視点を共有し、教育内容との関係を考え系統性のある指導内容を目指す。</p> <p>(4)テーマ・ねらいを明確にした研修会、教材教具展の開催や、公開研究会や学校見学、授業参観等で教育関係者や保護者からの助言を得て指導改善に生かす。</p>	<p>(1)小学部・中学部・高等部の年齢や発達段階に応じた指導の連続性の確立を図る教育課程の充実を進められたか。</p> <p>(2)教科会等を活用し、実践報告に加え、授業を見合う等の機会を設定し、学部・学年間の指導の連続性を意識することができたか。</p> <p>(3)清掃技能検定等に計画的に参加し、視点を共有し、教育内容との関係を考え系統性のある指導内容を目指せたか。</p> <p>(4)テーマ・ねらいを明確にした研修会、教材教具展の開催や、公開研究会や学校見学、授業参観等で教育関係者や保護者からの助言を得て指導改善に生かされたか。</p>	<p>(1)前担当者からの丁寧な引継ぎに基づいて、連続性を意識した指導内容等の設定ができた。</p> <p>部門研修会において「日常生活の指導」等に関する各学部の指導内容・方法を共有し、指導の連続性を意識することができた。</p> <p>(2)教科会や部門研修により、他学部の指導実践を知ることができた。</p> <p>年間34回を数えた研究授業において、ビデオ視聴を含めた参観と活発な研究協議を行うことで、指導の連続性を意識することができた。</p> <p>(3)高等部生徒46名が清掃技能検定に参加した。検定種目研修に複数の職員が参加し、その内容について高等部職員が共通理解を図り、系統性のある内容の指導に努めた。</p> <p>(4)各種研修の実施や夏季公開授業研究会における研究のテーマに沿った授業公開等を通し、講師や参加者から助言を得ることで指導改善に活かすことができた。</p> <p>授業参観時のアンケート等を通して保護者の意見等を得ることで、指導改善に努めた。</p>	<p>(1)研修会等で得られた情報を生かして、各部門・各学部において、指導内容の連続性を意識した体系的なまとめを行い、実際の指導のさらなる充実を図る。</p> <p>(2)児童生徒の状態が落ち着いてくる2学期以降や、指導内容やねらいを共有しやすい校内実習期間等、学部学年間の授業を見合う適切な機会の設定について引き続き検討する。</p> <p>(3)高等部においては、清掃技能検定自体の変更(充実)に応じて、より系統性のある指導内容の設定を目指す。</p> <p>他学部の職員も検定の視点に関する理解を深めつつ、作業や日常生活の指導における指導内容に系統性を持たせる。</p> <p>(4)次年度も大量異動が考えられることから、指導の継続性とスキルアップの両面から研修を企画立案・実施していくことが必要である。</p> <p>日数や予算が限られた中で、職員のニーズに応えられるよう、また部門(学部)研修を含めた校内研修の充実を図るため、日程や予算の配分、研修の数等を次年度から変更することとした。</p>	<p>(保護者)保護者対象のアンケート結果より</p> <p>○約9割の保護者が「児童生徒の年齢や発達段階に応じた、連続性・系統性を意識した指導内容を計画している」と肯定的な評価をしている。</p> <p>○約9割の保護者が「学部・学年間の連続性を意識した指導を展開している」と肯定的な評価をしている。</p> <p>○約8割の保護者が「学校見学・授業参観日などでいただいた意見を改善に生かしている」と肯定的な評価をしている。</p> <p>(学校評議員)</p> <p>○職員の大量異動により指導力低下等のリスクを軽減する手立てとして、「組織力の向上のための配置」と「職員個人のキャリアアップを意図した配置」の2点から教員配置を検討するという、企業の人事異動の考え方が参考になるのではないか。</p>	<p>(学校評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内外の前任者からの丁寧な引継ぎに基づいて、連続性を意識した指導内容等の設定ができた。 ・部門研修会のテーマに、年齢や発達段階に応じて連続的発展的な指導が求められる内容を取り上げた結果、指導内容・方法を共有することができ、指導の連続性を強く意識することができた。 ・各種研修の実施や夏季公開授業研究会、研究のテーマに沿った授業公開等を通し、講師や参加者から助言を得ることで指導改善に活かすことができた。 ・高等部の生徒が参加した「清掃技能検定」については、日常の指導段階から計画的に進め、指導効果を上げることができた。系統的指導の充実に繋げるためにも、今後、他学部職員に理解を広げていきたい。 <p>◎小学部から高等部までの、年齢や発達段階に応じた連続性のある指導内容・方法の確立に向けて、様々な校内研修や外部関係者からの指導助言を得る機会を設定したことによって、系統性・発展性のある内容構成が図られつつある。今後も同様の方向性で取り組みを継続していく。</p> <p>(改善方策等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆授業を見合うことについては、児童生徒の状態が落ち着いてくる2学期以降や、指導内容やねらいを共有しやすい校内実習期間等、適切な機会の設定について引き続き検討する。 ☆職員の大量異動という状況下における指導力の維持向上のために、学校組織としてのスキルアップと職員のニーズに応える研修を効率よく企画立案・実施する。

<p>2 一人ひとりの障害や発達、環境の把握による合理的配慮を含めた教育支援</p>	<p>(1)職員間、保護者との情報交換・連携を、ポイントを明確にしつつ効果的に行う。</p> <p>(2)個別の支援計画・個別教育計画の検討・作成への校内専門職の活用の充実を図り、専門職の日常的・多面的な活用による教育支援に繋げる。</p> <p>(3)発達の状況や障害特性に応じて合理的配慮の視点に基づいた教材・教具等の工夫に努め、効果的なチーム・ティーチングによる授業実践に繋げる。</p> <p>(4)具体的想定に基づき、リスクマネジメント研修や多様な訓練を実施し、教員の危機予測能力及び組織としての危機管理能力を高める。</p> <p>(5)ケース会を積極的に開き、より事前対処的な、人権に配慮した対応に努める。ケースの状況・内容によっては、ケース会の各段階をふまえて検討を進める。</p>	<p>(1)職員間、保護者との情報交換・連携を、ポイントを明確にしつつ効果的に行えたか。</p> <p>(2)個別の支援計画・個別教育計画の検討・作成への校内専門職の活用の充実を図り、専門職の日常的・多面的な活用による教育支援に繋がったか。</p> <p>(3)発達の状況や障害特性に応じて合理的配慮の視点に基づいた教材・教具等の工夫に努め、効果的なチーム・ティーチングによる授業実践に繋がったか。</p> <p>(4)具体的想定に基づき、リスクマネジメント研修や多様な訓練を実施し、教員の危機予測能力及び組織としての危機管理能力を高められたか。</p> <p>(5)ケース会を積極的に開き、より事前対処的な、人権に配慮した対応に努めることができたか。ケースの状況・内容によっては、ケース会の各段階をふまえて検討を進められたか。</p>	<p>(1)児童生徒の教育的課題の解決のために個別教育計画をもとに話し合いを重ねることができた。関係部署との連絡・報告を小まめに行い助言を受けることで、効果的な情報交換・連携に努めた。情報交換など繰り返し行うことによって、課題がより明確になることもあった。</p> <p>(2)個別教育計画作成時に、校内専門職が参加することにより、より専門的な視点に立った指導に繋げることができた。また、日常的にも必要に応じて専門職を活用することで、専門的な視点からの実態把握や合理的配慮を踏まえた教育支援を行うことができた。</p> <p>(3)学校生活や学習活動の見通しが持ちやすいように視覚支援の教材教具を準備したり、視覚・聴覚に障害がある生徒でも積極的に授業に参加できるような教材を工夫したり、合理的配慮の視点に基づき児童生徒の発達段階に応じた適切な指導内容や教材・教具の工夫に努めた。また、授業がすべての児童生徒に効果的に行われるようなチーム・ティーチングの実践に努めた。</p> <p>(4)プール以外の救急車要請訓練は、部門学部で具体的な想定を検討し、継続して訓練を実施し、主体的な取り組みが見られた。外部講師によるエピペン実技を含むアレルギー研修会や、スクールバス内の緊急時対応を想定した介助員対象研修等を実施した結果、実際場面により円滑な対応に繋がった。</p> <p>(5)昨年度に引き続き、実際のケース会を兼ねたインシデントプロセス法を用いたケース会研修を実施した結果、様々なケースの各段階に有効なケース会を実施し、人権に配慮しつつ、適切に対応することができた。相談担当が児童生徒の情報をスムーズに把握できるようになったことで、早い段階で校内の連携、外部機関との連携を図ることができた。</p>	<p>(1)ファイルやPCフォルダ等、情報共有しやすい手だてを検討し、活用する。「効果的に」ということについては課題が残る。ポイントを明確にすることをより意識していく。</p> <p>(2)専門職と担任が連携をとり、組織的・継続的な活用の機会を増やし、充実させるため、コーディネーター的役割の検討も含めた専門職の活用システムの確立・活用方法の見える化を図る。</p> <p>(3)一人ひとりの障害や発達状況に応じた教材教具の更なる充実を図るとともに、集団の中でも児童生徒が見通しをもって充実した活動ができるよう合理的配慮を含めた組織的・効果的な指導方法を確立させることが必要である。</p> <p>(4)環境把握を含めた全体的な危機予測能力を高められるように、日々声をかけあい、危険を想定しながら危機管理力の向上に努める。プールの救急車要請訓練やスクールバス内を想定した訓練については、指導グループ単位で設定し実施するよう働きかける。</p> <p>(5)オンザフライミーティング等の手法を活用し、日常的に「話し合う意識」を高めることで、より事前対処的な対応を目指す。生徒指導・生活指導の増加及び多様化への迅速な対応のために、指導体制の組織化が必要である。</p>	<p>(保護者)保護者対象のアンケート結果より ○約8割の保護者が「教員間及び保護者との情報交換・連携を効果的に行っている」と肯定的な評価をしている。 ○約9割の保護者が「合理的配慮の視点に基づいた教材・教具の工夫に努め、授業実践につなげている」と肯定的な評価をしている。 ○約9割の保護者が「児童生徒の人権に配慮した対応に努めている」と肯定的な評価をしている。</p> <p>(学校評議員) ○福祉施設等が進路先となることが想定される生徒に対する「キャリア教育」を、「ライフキャリア」の視点で捉えた指導実践は的を射ている。 ○ライフキャリアの指導については、学校と家庭の連携が必須である。</p>	<p>(学校評価) ・個別教育計画作成時のみならず、日常的に専門職を活用することによって、的確な実態把握と合理的配慮を踏まえた教育支援を行うことができた。 ・救急車要請訓練や外部講師によるエピペン実技を含むアレルギー研修会等、部門学部で具体的な想定を検討しつつ、継続して訓練を実施した結果、職員の主体性や危機意識の高まりが見られた。プール指導中を想定した訓練は今後の課題となる。また、スクールバス内での緊急時対応を想定した介助員対象研修等を実施した結果、実際場面により円滑な対応に繋がった。 ・実際のケース会を兼ねたインシデントプロセス法を用いたケース会研修を昨年度から継続した結果、様々な課題に有効なケース会を実施し、適切に対応することができるようになりつつある。</p> <p>◎保護者との情報共有や関係者の積極的な連携による個別教育計画作成、及び効果的なチーム・ティーチングの実践については、一定の成果が見られた。合理的配慮の視点を踏まえた教育支援を、さらに組織的にすすめるために、研修を繰り返し、理解を深める必要がある。</p> <p>(改善方策等) ☆コーディネーター的役割検討も含めた専門職の活用システムの確立・円滑な活用のために、要項等を作成し、見える化を図る。 ☆計画的に設定するケース会のみならず、オンザフライミーティングのような時間効率のよい情報共有の手法を活用し、日常的に「話し合う意識」を高める。 ☆生徒指導・生活指導への迅速な対応のために、組織の構成メンバーを変更し、機動力を高める。</p>
--	---	--	--	--	---	---

<p>3 「キャリア教育」の視点による長期展望を基に、各学部段階の関係性を押さえた教育指導の充実</p>	<p>(1) 個別の支援計画・個別教育計画を基に、保護者との間で「キャリア教育」の視点の共有化を図る。</p> <p>(2) 将来を見通す力を育成するため、体験研修やアフターフォローへの同行など、より多くの教員が参加できる実践的研修を設定する。</p> <p>(3) 各学部段階における「キャリア教育」の内容を整理・検討し、教育課程や各個別の計画に反映する。</p> <p>(4) 各学部段階に応じた課題を保護者と共有するため、具体的で細やかな情報提供を、担任・保護者向けに行う。</p> <p>(5) 積極的な社会参加に向け、「清掃技能検定」に関する情報を共有し、日常の授業改善に生かす。</p>	<p>(1) 個別の支援計画・個別教育計画を基に、保護者との間で「キャリア教育」の視点の共有化を図ることができたか。</p> <p>(2) 将来を見通す力を育成するため、体験研修やアフターフォローへの同行など、より多くの教員が参加できる実践的研修を設定することができたか。</p> <p>(3) 各学部段階における「キャリア教育」の内容を整理・検討し、教育課程や各個別の計画に反映できたか。</p> <p>(4) 各学部に応じた課題を保護者と共有するため、具体的で細やかな情報提供を、担任・保護者向けに行えたか。</p> <p>(5) 積極的な社会参加に向け、「清掃技能検定」に関する情報を共有し、日常の授業改善に生かされたか。</p>	<p>(1) 今年度より、個別教育計画の様式の中にキャリアの視点を示すようにし、それぞれの目標がキャリアの視点のどの領域に当てはまるかについて保護者と共通理解を図った。保護者との視点の共有化を図るために、保護者対象の研修会開催や学部研究において事例研究を行った。</p> <p>(2) 夏季休業期間等を活用し、多くの教員が卒業生のアフターフォローを兼ねた企業・施設見学を行った結果、卒業後の生徒の生活をイメージ化することができた。</p> <p>(3) 授業案にキャリアの視点を明記する等、各学部段階において今何を学ぶべきかを意識しながら教育実践することを通じて、キャリア教育の視点に立った指導内容を整理した。</p> <p>(4) 日々の連絡帳やクラス通信、学校だより等を通じて様々な情報提供を行う他、学部・学年学級懇談会等において直接対話をしながら、保護者と課題を共有した。進路専任や学部進路担当との連携により、将来に向け必要な情報提供を行った。</p> <p>(5) 清掃技能検定について研修した教員を中心に、清掃内容の具体的な情報を共有しながら、日常の清掃指導を実践した。他学部の職員が清掃技能検定に関する情報を共有することは難しかった。</p>	<p>(1) 「キャリア教育」の視点による長期展望を保護者と共通理解するために、教員間でしっかり視点を共有し、懇談会や個別面談等を活用し、繰り返し説明に努める。</p> <p>(2) 生徒の卒業後の生活や将来を見通した支援についての理解をより深めるために、実践的研修への積極的参加を継続していく。</p> <p>(3) 職員が大幅に入れ替わる中、本校におけるキャリア教育についてあらためて共通理解を図るとともに、「キャリア教育」の指導内容についての整理をさらに進める。</p> <p>(4) 保護者の求めている情報を常に把握し、迅速且つ正確な情報発信に努める。また、情報発信の方法も必要に応じて直接的・対話的に行い、保護者の信頼を得られるようにしていく。</p> <p>(5) 清掃技能検定に向けての取組だけでなく、その趣旨について教員間で共通理解を図ることによって、各学部段階の日常生活指導や作業の授業改善を図ることが必要である。</p>	<p>(保護者) 保護者対象のアンケート結果より ○約8割の保護者が「教員は「キャリア教育」の内容を整理・検討し、個別教育計画に反映している」と肯定的な評価をしている。</p> <p>○約8割の保護者が「教員との間でキャリア教育の視点を共有している」と肯定的な評価をしている。</p> <p>○約8割の保護者が「教員との間で、課題を共有するため、具体的で細やかな情報提供を行っている」と肯定的な評価をしている。</p> <p>(学校評議員) ○清掃業への就労者減少傾向が懸念されている中で、清掃技能検定への積極的な参加は、業界にとってもうれしい取り組みであるから、より積極的な取り組みを望む。</p> <p>○清掃技能検定のへ参加が、単に清掃技能評価を目的としてではなく、「検定の場の設定そのものに指導上大きな効果が期待できる」との考えに同感である。</p>	<p>(学校評価) ・今年度より、個別教育計画の様式の中にキャリアの視点を示したことによって、それぞれの目標や指導内容がキャリアの視点のどの領域に当てはまるかについて、より明確に意識することができ、保護者と共通理解を図ることができた。</p> <p>・清掃技能検定について研修した教員を中心に、検定内容の具体的な情報を共有しながら、日常の清掃指導を実践した。清掃業への就労者減少傾向が懸念されている中で、清掃技能検定への積極的な参加は、進路支援の観点からも効果的であると考えられる。</p> <p>◎本校の「キャリア教育」の指導内容について、日常の教育実践を教員間や保護者と振り返ることによって整理を進めてきた。今後は、「めざす児童生徒像」からキャリア教育を捉え直したり、学校全体で共通のテーマを掲げた取り組みを行ったりすることで、指導の充実を図る。</p> <p>(改善方策等) ☆清掃技能検定に向けての取組だけでなく、その趣旨について教員間で共通理解を図ることによって、各学部段階の日常生活指導や作業の授業改善を図る。</p> <p>☆「キャリア教育」の視点による長期展望について、保護者との共通理解を促進するために、教員間でしっかり視点を共有し、懇談会や個別面談等を活用し、繰り返し説明に努める。</p>
--	---	--	---	--	---	---

<p>4 地域との多様なつながりを継続拡充し、支援教育のセンター機能によるインクルーシブ社会形成の推進</p>	<p>(1) 公開研修会や教材教具展、学校公開等の機会に合理的配慮の視点を情報発信する。</p> <p>(2) 地域や関係機関との多様な連携・活動の継続により、理解推進や協力関係を充実させる。</p> <p>(3) 居住地交流や研究会等の繋がりを強化し、地域の小・中学校の支援教育推進と本校の教育理解に努める。</p> <p>(4) コーディネータ会議や巡回相談・ボランティア育成等を通し、高等学校との関係を深め、高校のインクルーシブ教育推進に協力する。</p> <p>(5) 地域関係者の招聘や専門職の派遣・活用等を通して、校内外の各段階でのケース会議の円滑な企画・運営力を向上させ、多様な困難への即応力・機動性に繋げる。</p>	<p>(1) 公開研修会や教材教具展、学校公開等の機会に合理的配慮の視点を情報発信することができたか。</p> <p>(2) 地域や関係機関との多様な連携・活動の継続により、理解推進や協力関係を充実させることができたか。</p> <p>(3) 居住地交流や研究会等の繋がりを強化し、地域の小・中学校の支援教育推進と本校の教育理解に努めたか。</p> <p>(4) コーディネータ会議等や巡回相談・ボランティア育成を通し高等学校との関係を深め、高校のインクルーシブ教育推進に協力できたか。</p> <p>(5) 地域関係者の招聘や専門職の派遣・活用等を通して、校内外の各段階でのケース会議の円滑な企画・運営力を向上させ、多様な困難への即応力・機動性に繋がられたか。</p>	<p>(1) 教材教具展では、保護者や他校の教員に対して、自作教材を中心に合理的配慮の視点を情報発信することができた。公開研修・研究会でも、同様に専門的知識や指導技術の発信を通して特別支援学校で実際に行われている合理的配慮について校外の参加者に知らせることができた。</p> <p>(2) 校内で行っている合理的配慮の情報をもとに、金沢区小学校長会において本校の取り組み例を紹介し支援教育の推進を図った。また、地域の理解・啓発活動に参加し、支援教育の視点から助言・提案・学習会講師を行うことで、広く障害の理解推進に努めた。</p> <p>(3) 居住地交流では、手続きをさらに明確化するとともに交流の枠を整備し、準備を進めやすくした。学校間交流では、学級の小集団での交流後、大集団で交流を行うという新たな試みを行い、お互い無理のない形で交流できた。地域の施設や医療機関、行政機関の協力のもとに、学習会や学校見学会を開き、保護者や児童生徒のニーズや学校の支援体制について理解してもらうことができた。小中学校の研修会や研究会、連絡会の機会に情報発信を行った。</p> <p>(4) 高等学校コーディネータ会議を通してスクールソーシャルワーカーやコーディネータとのつながりができ、センター機能についての理解が進んだ。新たに3校から巡回相談の依頼等があり、繋がりができた。</p> <p>(5) 新たに、県警相談センターや南部ユースプラザなどの支援機関と連携ができ、問題行動や不登校、家庭の問題などで苦戦している児童・生徒を支援することができた。</p>	<p>(1) ホームページ記載内容、記載期間等の改善を図り、より効果的な情報発信に努める。特別支援学校の学校内での活動そのものが合理的配慮に基づいて行われていることから、魅力ある公開研修・研究会の実施と地域のより多くの教員等の来校を促すための工夫が必要である。</p> <p>(2) 引き続き、地域に向けて合理的配慮やインクルーシブ教育についてわかりやすく伝えて更なる理解推進を図っていく。生徒の卒業後の希望や保護者の願い、要望について地域の関係機関に理解を深めてもらうための学習会や意見を交換する機会を設ける。</p> <p>(3) 今後、合理的配慮が本格的に求められるようになるので、引き続き地域の小中学校との繋がりを深めていく。関係するチームと連携協力して、合理的配慮についての具体的な情報発信について検討し実施していく。</p> <p>(4) ケース会の持ち方を工夫し、個人の相談から高等学校全体の支援に繋げることに努める。</p> <p>(5) 関係機関と今以上に密接に連携できるよう、支援担当者が積極的にコーディネートする。</p>	<p>(保護者) 保護者対象のアンケート結果より ○約3割の保護者が「学校は、地域の小・中学校との様々なつながりを通して、支援教育の推進と本校の教育理解を図れているか」という設問に対し、「わからない」と回答している。 ○約4割の保護者が「学校は、巡回相談・ボランティア育成を通し高等学校との関係を深め、高校のインクルーシブ教育推進に協力していると思うか」という設問に対し、「わからない」と回答している。</p> <p>(学校評議員) ○児童生徒の学校以外での生活(家庭生活等)における困難を解決するために、福祉施設の相談機能等との積極的な連携を望む。 ○児童生徒の学校近隣における活動が目に見えるようにすることにより、本校の理解推進を促進する機会となるので、活動時のより積極的なPRを期待する。</p>	<p>(学校評価) ・教材教具展や公開研修・研究会において、保護者や他校の教員に対して、合理的配慮の視点を情報発信することができた。 ・校内で行っている合理的配慮の情報をもとに、地域の理解・啓発活動に参加し、本校の取り組み例を紹介し支援教育の推進を図った。支援教育の視点から助言・提案・学習会講師を行うことで、広く理解推進に努めた。</p> <p>◎インクルーシブ教育の推進と合理的配慮の視点に基づく教育支援の実現のために、センター機能による地域支援を積極的に実施し、地域の小中学校の支援教育の推進に貢献することができた。高等学校への支援強化が今後の課題である。</p> <p>(改善方策等) ☆ホームページ記載内容、記載期間等の改善を図り、より効果的な情報発信に努める。 ☆生徒の卒業後の希望や保護者の要望について、地域の関係機関に理解を深めてもらうための学習会や、意見を交換する機会を設ける。 ☆児童生徒の学校以外での生活(家庭生活等)も視野に入れつつ、その困難を解決するために、福祉施設の相談機能等との積極的な連携を心がける。 ☆職員ならびに保護者に対して、センター機能の理解推進を進めるために、具体的な活動状況や成果を各種お便りの記事としてタイムリーに発信したり、校内研修会・実践報告会を設定したりする。</p>
---	--	---	---	--	---	--

<p>5 保護者・地域への情報発信に努め、円滑な連携・協働を拡充し、信頼を得られる学校運営</p>	<p>(1)地域の教育資源（ゲストティーチャー・ボランティア等）を活用し、継続的な学校支援を推進する。</p> <p>(2)いのちの大切さを基本とし、多様な想定をもとに、児童生徒の安全や健康を守る環境や体制・マニュアルを作成し、各部門・学部での実践的活用を図る。</p> <p>(3)開かれた学校としてホームページの活用や、学校を公開する機会を積極的に設けて理解推進を図り、関係諸機関や児童生徒の各家庭との連携を深める。</p> <p>(4)教員一人ひとりが学校の体制や取り組み等を理解した上で説明責任を果たし、タイムリーでより「見える化」を図った情報発信を心がける。</p> <p>(5)具体的想定での多様な防災訓練の実施や、地域防災訓練への積極的な参加等を通し、防災マニュアルの改善や地域資源に結びついた防災計画を検討する。</p>	<p>(1)地域の教育資源（ゲストティーチャー・ボランティア等）を積極的に活用し継続的な学校支援を推進できたか。</p> <p>(2)いのちの大切さを基本とし、児童生徒の安全や健康を守る環境や体制・マニュアル作成や見直しの過程で、多様な想定を基に、各部門・学部での実践的活用を図れたか。</p> <p>(3)開かれた学校としてホームページの活用や学校を公開する機会を積極的に設けて理解推進を図り、関係諸機関や児童生徒の各家庭との連携を深められたか。</p> <p>(4)教員一人ひとりが学校の体制や取り組み等を理解した上で説明責任を果たし、タイムリーでより「見える化」を図った情報発信を心がけたか。</p> <p>(5)具体的想定での多様な防災訓練の実施や、地域防災訓練への積極的な参加等を通し、防災マニュアルの改善や地域資源に結びついた防災計画を検討したか。</p>	<p>(1) 修学旅行の事前学習における沖縄舞踊、総合的な学習（金融教育）の一環としてのゲストティーチャー、プール授業や読み聞かせ、金沢フェスティバルのボランティア等を活用することで、授業や行事等の教育活動を充実させることができた。</p> <p>(2)医療ケア等の実施手引きの見直しは、継続して行っている。また急な対応を迫られた追加研修も実施した。学校周辺で生徒が不明となったことを想定して実施した緊急搜索訓練の反省点や実際の搜索時に出てきた課題等、迅速に改善した。スクールバス介助員向けに研修会を開いた結果、バス内での生徒の体調不良に適切に対応することができた。</p> <p>(3)適切な時期に情報を公開することに努めた結果、例えば「学校へ行こう週間」見学者のアンケート回答数のうち、20%近くがホームページ閲覧がきっかけでの来校であった。</p> <p>(4)「学校運営要項」について、当該文書の閲覧を容易にするシステムを構築した。年度途中から看護師の体制表を作成し、看護師の動きの見える化に努めた。また、非常食、発電機等の置き場や、避難経路の標示をしており、継続中である。会計担当職員の声掛け、適宜的な会計処理によって会計事務は概ね順調に進んだ。</p> <p>(5) 防災マニュアルの見直しを行うとともに、定期的に安全点検や特別教室等の整備を実施し、安全な学習環境の維持に努めた。不審者対応訓練では、授業中の具体的想定に基づいてデモンストレーションを行うことで、より実際的な対応方法を全体で確認することができた。</p>	<p>(1)ボランティア、ゲストティーチャーの登録方法や活用方法を校内で周知し、より積極的に活用し、教育活動の充実に努める。実践例を朝の打ち合わせ等で知らせたり、資料をファイリングしたりすることで、他学部、他学年に情報提供のきっかけとする。各学部において、通年または学期ごとのボランティア活用計画の作成を促進する。</p> <p>(2)年度当初に搜索体制の確認を行い、実際の搜索活動がスムーズに行えるようにする。課題や反省点はその都度改善し、その後の搜索活動にいかす。夏季休業中のスクールバス介助員向け研修を継続して行う。また、他にも情報共有が必要な関係者に対し説明をする機会をもつ。環境整備のみならず、日常的な防災教育、安全教育の必要性に対する職員の理解推進を図る必要がある。</p> <p>(3)ホームページをよりスムーズに運用できるようにし、年度途中でも必要に応じて標示内容の検討を重ねるとともに、他にも必要な情報の標示をしていく。また、よりアピールポイントの高いものにするため、全体のデザインを含めたリニューアルを検討する。</p> <p>(4) 新たなシステムについて、全体に周知し利用促進を図る。生徒会費やPTA会費等の計画的な執行を促していく。業務の細分化が進む中、担当する業務だけでなく、教員間の連携や協力の必要性が高まってきた。</p> <p>(5)不審者対応に不足している必要物品（さすまた、スプレー等）の整備が必要である。定期的点検を要する項目の洗い出しと、防災の視点を取り入れた点検内容の整理、そして具体的な改善に向けての作業を連動させ、効果的に進める。</p>	<p>(保護者) 保護者対象のアンケート結果より ○約8割の保護者が「具体的想定での多様な防災訓練の実施、防災マニュアルの改善や地域資源に結びついた防災計画を検討している」と肯定的な評価をしている。</p> <p>(学校評議員) ○災害時に近隣から協力を得るためには、本校や特別支援学校に対する理解を推進する必要があるとの意見があった。 ○災害時の避難場所として、屋上の活用を引き続き検討していくことが必要であると考ええる。</p>	<p>(学校評価)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア等の地域資源の活用に継続的に取り組むことによって定着化が図られ、教育活動を充実させることができている。 ・年度途中にも体制・マニュアル等の作成や見直しをタイムリーに行うことで、より円滑な教育活動に繋がるケースがあった。 ・会計担当職員の声掛け、適切な会計処理によって会計事務は概ね順調に進んだ。 ・不審者対応訓練等、授業中の具体的想定に基づいたデモンストレーションを行うことで、より実際的な対応方法を全体で確認することができた。 <p>◎的確な情報発信手段の選択や運用の改善によって、保護者や地域への情報発信力が向上しつつある。更なる工夫が望まれる。また、「具体的想定」を強く意識したリスクマネジメント研修や多様な訓練を実施した結果、教員の危機意識や予測能力の高まりが見られた。さらに多様な訓練を実施し、組織としての危機管理力の更なる向上を目指す必要がある。業務の細分化が進む中、担当する業務だけでなく、教員間の連携や協力の必要性が高まってきた。</p> <p>(改善方策等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆ボランティア、ゲストティーチャーの登録方法や活用方法・実践例・資料の見える化を図ることで、他学部、他学年に情報提供のきっかけとする。また、各学部において、通年または学期ごとのボランティア活用計画の作成を促進する。 ☆定期的点検を要する項目の洗い出しと、防災の視点を取り入れた点検内容の整理、そして具体的な改善に向けての作業を連動させ、効果的に進める。 ☆本校及び特別支援学校に対する近隣の方々の理解をより推進するために、校外活動等の機会を捉え、視覚的手だてを活用し積極的PR活動を行う。
---	--	--	--	---	--	---